『資本論』準備原稿についての覚え書き

三宅義夫

まえがき

本稿はもともと上記のような表題で書くつもりであったものではなく、別のある事柄について書こうとしたものであった。そのはじめのところで、予備的な説明として、『資本論』に関係するマルクスの原稿としてこんなものがあるということを簡単に一覧表的にしるそうとして記してゆくうち、あれこれ心覚え的に書きとめていると当初の意に反してだいぶ長くなってしまった。そこで、これだけをとり出して上記のような表題のものとすることとしたしだいである。

なお、マルクスの経済学研究はけっきょくにおいて『資本論』の作成という形をとることになっていったのであるから、そういう点からは、初期の経済学にかんする原稿ないし著書を広くは『資本論』の準備原稿のなかに含めることも考えられるが、ここでは一八五〇年に大陸からロンドンに移り住み、そこで経済学の研究を新たにやり直したと

きからのものについて記しておくこととする、――「まったくはじめからやり直し、新しい材料を批判的に研究しつくそう」と「決意」した（一八五九年刊『経済学批判』の「序言」）――。

また、マルクスは経済学研究に当たって、読んだ書物、雑誌、等から数多くの抜き書き帳（Exzerptheft）をつくっていた。この抜き書き帳をつくることは一八四〇年代から行なっていたことであり、そして五〇年代、六〇年代には多くの抜き書き帳がつくられている。この抜き書き帳は、どういうものから、どういう事柄が抜き書きされているかを知りうること自体がマルクスの経済学研究を見るうえで有用であるばかりでなく、ところどころにマルクス自身の文が記されている場合がある。本稿で見ておこうとしているのは原稿（Manuskript）であるが、抜き書き帳についても若干のことは記しておくこととしたい。(1)

（1）ソ連のマルクス主義・レーニン主義研究所と東ドイツのマルクス主義・レーニン主義研究所との共同事業として一九七五年から出版されはじめた *Marx / Engels Gesamtausgabe*（マルクス・エンゲルス全集。略称 *MEGA*, メガ。以下、新ＭＥＧＡと記す）は四つの部（Abteilung）に分かれているが、『資本論』関係の原稿は第二部に、そして抜き書き帳は第四部に収録されることになっている（その他、第一部は、『資本論』およびそれに関係する原稿以外の、すべての著書、論文、原稿を、第三部は書簡を、収録することになっている）。

なおこの新ＭＥＧＡにたいし、旧ＭＥＧＡは、モスクワのマルクス・エンゲルス研究所から一九二七年に第一部の第一巻第一分冊が発行され、以後一九三五年までに第一部で第七巻まで、第三部で第一巻～第四巻の計一二冊、それにエンゲルス死去四〇年を記念して『反デューリング』および「自然弁証法」についてのものが一九三五年に別巻として一冊発行されたので、これを加えて合計一三冊発行された。そしてそこで刊行がとまっていた（新ＭＥＧＡはこの仕事を引きついだものであるとともに、はじめから新たにやり直すこととしたものである）。

表紙の表題が *Marx / Engels Gesamtausgabe*（アンダーライン―三宅）であることは新旧とも同じであるが、フルタイトルは新ＭＥＧＡは *Karl Marx / Friedrich Engels, Gesamtausgabe* であるのにたいして、旧ＭＥＧＡは *Karl Marx /*

Friedrich Engels, Historisch-kritische Gesamtausgabe, Werke / Schriften / Briefe となっていた。旧ＭＥＧＡのこの仕事は長年にわたってマルクス、エンゲルスの文献研究に携わっていた上記研究所々長リャザノフ（D. Rjazanov）の手ではじめられたものであった。そしてリャザノフは、第一部第一巻、第二巻の三冊と第二部の第一巻～第三巻の三冊の計六冊を一九二七年から三〇年までのあいだに出版してきたが、しかし一九三一年はじめに当時の政治的事件に連座して追放され、代わってアドラツキー（V. Adoratskij）が同研究所々長に就任した。また同研究所の名称は所長交代後マルクス・エンゲルス・レーニン研究所と改称された（こんにちでは前記のようにマルクス主義・レーニン主義研究所）。

この旧ＭＥＧＡは新ＭＥＧＡと同じ四部編成の企画であり、第二部が『資本論』およびその準備労作、第一部はそれ以外の著書、論文等、第三部は書簡、という分け方のところまでは一応同じであったが、抜き書き帳類を新ＭＥＧＡでは独立に第四部としているのにたいし、旧ＭＥＧＡではこれを第一部に含め、第四部は索引に当てることを予定していた。出版された最後の第一部第七巻に収録されていたのはまだ一八四八年三月～一二月の論文であり（年代順の収録）、また第三部第一～第四巻はマルクス、エンゲルス間の往復書簡であって、第三者への書簡にはまだ及んでいなかった。そして「『資本論』およびその準備労作（Das ≪Kapital≫ mit Vorarbeiten）」として予定していた第二部は一冊も出ていなかった（新ＭＥＧＡでの第二部は Das „Kapital" und Vorarbeiten と記されている）。

なお、旧ＭＥＧＡについての紹介としては杉原四郎「マルクス・エンゲルス全集（MEGA）」（杉原『マルクス・エンゲルス文献抄』、一九七二年、未来社刊、一五五～七九ページ）が書かれている。また一九七〇年に西ドイツのオーベルマン（Auvermann）社から全一三冊の復刻版が刊行された。新ＭＥＧＡ第一部第一巻最初の「全集への序言（Vorwort zur Gesamtausgabe）」のところでも、旧ＭＥＧＡについて――比較的簡単にではあるが――記されている（S. 33*～34*）。

一　一八五七年～五八年の原稿――Grundrisse

一八五七年一〇月～五八年五月に七冊のノートに書いた一連の原稿。これは *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*（『経済学批判要綱』）と名づけられて、一九三九年に本巻（七冊のノートの本文を収めたもの）が、一九四一年

に補巻が、モスクワのM・E・L研究所編で出版され、戦後一九五三年にこのモスクワ版を一冊に合わせて写真印刷をしたものが、東ドイツのディーツ（Dietz）社から出版された（以下、七冊のノートの原稿のほうをGrundrisseと呼び、これと区別してこの出版された本のほうを『グルントリッセ』と呼ぶことにする）。

その後一九六八年と六九年に、ロシア語版マルクス・エンゲルス *Werke* 第二版の第四六巻第一冊、第二冊としてロシア語で――しかし翻訳に当たっては一九三九～四一年に出版したドイツ文と原稿とを改めて対比して訂正を加え――出版された。[2] また一九七六年には新MEGAの第二部第一巻第一冊として前半部分――くわしくは後述――が出版された。

（2）このロシア語版については山本義彦「ロシア語版『経済学批判要綱』について」、(1)、(2)（大阪市立大学『経済学雑誌』、一九七二年八月、九月）において、これの紹介、およびロシア語版に付されているソ連M・L研究所の序文の邦訳、ロシア語版の目次とドイツ語版の目次との対照がなされており、またその後同氏によって、ロシア語版に付されている編集者注の邦訳がなされている（「ふたたびロシア語版『経済学批判要綱』について」、(1)、(2)――静岡大学『法経研究』、一九七五年一〇月、七六年二月）。

この七冊のノートのうち第一冊と第二冊のはじめの部分は II Das Kapitel vom Geld（貨幣の章）という表題で書かれ、第二冊の八ページ以下第七冊のほとんど終わりまでが〔Ⅲ〕Das Capitel vom Capital（資本の章。〔Ⅲ〕は編集者がつけたもの）という表題で書かれ、[3] 第七冊の最後の六三ページのところに I Wert（価値）と題した一ページたらずの一文が書きかけの途中でとぎれて終わっている。

（3）この〔Ⅲ〕のところは、第二冊の八ページでは Das Capitel vom Geld als Capital（資本としての貨幣の章）という表題になっていたが、第三冊の八ページ（第三冊の一～七ページは「一八五七年七月」の日付で後掲の「バスティアとケアリ」

が書かれていた。したがって Grundrisse の原稿自体としてはこの第三冊の第八ページが、ノート第二冊から第三冊に移ったはじめのところである）では、Das Capitel vom Capital.（Fortsetzung.）（von Heft II）（資本の章。第二冊のつづき）という表題になっている（『グルントリッセ』S. 150, 200. 新ＭＥＧＡ第二部第一巻第一冊 Apparat, Teil 1, S. 34, 37）。

なお、「貨幣の章」のほうは第一冊でも第二冊でも Das Kapitel vom Geld と表題を記していたのにたいし、「資本の章」のほうはこのように Das Capitel vom Capital という書き方で記し、第四冊でも同様であった。（*a. a. O.* Apparat, Teil 1, S. 34, 38. アンダーライン―三宅）。「資本」は本文中でも das Capital と記しているので、それとの釣り合いで「章」のほうもこう記していたのであろう。

「資本の章」はこのようにノート第二冊の八ページからはじまり、ノート第七冊にいたっているが、表題としてはこれをさらに分けた表題は付されていない。しかしノート第七冊の一五ページの途中のところでつぎのように記している、――「われわれはいまやつぎのところに到達した。第三篇（Dritter Abschnitt）。果実をもたらすものとしての資本。利子。利潤」（『グルントリッセ』、S.631）。そして一九五三年版（したがって一九三九年、四一年版。以下一九五三年版と記す）の編集者は、巻末の目次の箇所でその前の部分を、「第一篇。資本の生産過程」――ノート第二冊八ページからノート第四冊一五ページの途中まで――、第四冊一五ページの途中から第七冊一五ページの上記の「第三篇」がはじまるところまでを「第二篇。資本の流通過程」として分けていた。新ＭＥＧＡでは本文のなかでも〔　〕を付して、ノート第二冊八ページからを「第一篇。資本の生産過程」と記している。そして同新ＭＥＧＡ第二部第一巻第一冊はこの「第一篇」の終わったところまで、すなわちノート第四冊一五ページの途中まで（『グルントリッセ』でのS.305の六行目まで）を収録し、ノート第四冊一五ページの途中からはじまる「資本の流通過程」以下を第二冊に回している。「資本の章」の大部分はこの資本の生産過程、流通過程を取り扱った第一篇と第二篇とから成っており、第

三篇に入ったはずのノート第七冊の一五ページ以下のところでも、本来の第三篇にかんする部分はわずかであって、途中で「貨幣の章」に属する事柄が記されたりしている。

このように、七冊のノートの一連の原稿は「Ⅱ 貨幣の章」ではじまり、ついで「資本の章」に入り、七冊目の最後のところで「Ⅰ価値」と題する一文が一ページたらず書かれている、という構成になっており、（この「価値」の一文についてはまた後述のところを見られたい）、また「資本の章」は三つの「篇」に分かれている。

そしてこの七冊のノートの原稿を書き終えるのに近くなったころ、マルクスは、ドイツでの出版の交渉を依頼していたラサールにあててつぎのような手紙を書いている、――「第一分冊（die erste Lieferung）はどうしても一つの相対的にまとまったもの（ein relatives Ganzes）にならざるをえないだろう。そしてそこには全展開の基礎（die Grundlage für die ganze Entwicklung）が含まれているのだから、五―六ボーゲン以下でまとめるのはむずかしいだろう（würde sie schwerlich unter 5—6 Bogen zu machen sein）。だがそうするよう最後の仕上げのさいに努力しみよう（Doch werde ich das bei der finalen Ausarbeitung sehen）。それはつぎのものを含む、1．価値、2．貨幣、3．資本一般（das Kapital im allgemeinen）（資本の生産過程、資本の流通過程、両者の統一または資本と利潤、利子（Kapital und Profit, Zins））。これは独立の一小冊（ein selbständige Broschüre）[4]となる。……出版者がこの件に応じるならば、第一分冊は五月末ごろに彼の手に届けられうるだろう」[5][6]（一八五八年三月一一日付の手紙。傍点―三宅）。

（4）*Werke* 版では Brochure となっている。誤植であろうか。

（5）ここでマルクスは、五～六ボーゲン以下でまとめるのはむずかしいだろうと記している。じっさいに出版した第一分冊の

著書『経済学批判』が含んでいたのは、この当時予定していた第一分冊の内容とちがって上の(1)価値と(2)貨幣の部分だけであったが、この『経済学批判』は「約一二印刷ボーゲン」となった。「原稿は一二印刷ボーゲン（ノート三冊）ほどだ（Das Manuskript ist about 12 Druckbogen (3 Hefte)）。そして――たまげないでくれ――表題は『資本一般（Das Kapital im allgemeinen)』」となっているのに、これらの冊には資本についてはまだなに一つ入っていないで、1．商品、2．貨幣または単純な流通、の二章しか入っていない。つまり、細目にわたって手を入れた部分（der im Detail verarbeitete Teil）（五月に君のところに行ったとき）はまだぜんぜん出てきていないことになるのだ」（「一八五九年一月一三日と一五日とのあいだ」と推定されているマルクスからエンゲルスへの手紙）。なお一印刷ボーゲン（Druckbogen）はA5版ぐらいのもので一六ページである。

また、七冊のノートでの Grundrisse の分量のほうはどの程度であったかを見ると、新MEGA編集者はノート第四冊の二四ページから第七冊の五ページまでについて、ノートで一一一ページ、「これは約二〇印刷ボーゲンをなしている」と記している（第二部第一巻、Apparat, Teil 1, S. 16）。ここから推測すると Grundrisse は全体では五〇ボーゲンをこえている。したがって「第一分冊」を五～六ボーゲン以下でまとめるのはむずかしいとマルクスが言っていたとき、「第一分冊」の「最後の仕上げ」に当たっては――この「第一分冊」の内容は前記のように七冊のノートでの内容と、すくなくともその主たる範囲においては、同じものが予定されていた――、マルクスは七冊のノートのかなりの部分を大幅に削って省いてしまうとか、あるいはそれらをあとの分冊に回す、といったことを考えていたことになる。

マルクスは上の一八五八年三月一一日付の手紙の前の、同年二月二二日付ラサールへの手紙のなかでつぎのようなことを述べている。すなわち、「全体を公刊する前に、それを完全に仕上げる時間と余裕と資力とがあるならば、僕はそれをうんと圧縮するだろう。というのは、僕は以前から圧縮法が好きだったのだから（da ich von jeher die Methode der Kondensation geliebt）。しかし、あいつづいて出る分冊で印刷されるようにするならば――読者が理解するためにはおそらくこのほうがよいだろうが、しかし形式がそこなわれることはたしかだ――、事はどうしてもいくぶん冗長になる」というように「圧縮」について語っている。だが、「第一分冊」の下書き的なもの――しかもこれは当時予定していた「第一分冊」に入れる内容としては前記のようにだいぶ欠けている部分があった――が五〇ボーゲンをこえていることと、「第一分冊」を五～六ボーゲン以下でまとめるのがむずかしいと言っていることとのあいだには、量的な開きがあまりにも大きすぎるので、じっさいのところ

ろ、この一八五八年三月の当時マルクスはいったいどういうつもりでいたのだろうかと、いささかいぶかしくさえ思われるのである。

そして実際には、この当時予定していた「第一分冊」のなかの最初の二つの章の一八五九年一月に書き上げた印刷用原稿は約一二ボーゲンとなったのであるが、これについてマルクスは同じくラサールへの一八五八年一一月一二日付の手紙のなかで、つぎのように述べている、――「僕はおよそ四週間のうちには完成できるだろう。というのは、じっさい書くことをつい先日はじめたからだ（Ich werde in ungefähr 4 Wochen fertig sein, da ich eigentlich mit dem Schreiben erst angefangen）。……たぶん、第一の部分（die erste Abteilung）『資本一般（Das Kapital im Allgemeinen）』はすぐに二冊（2 Hefte）〔印刷しての冊のこと〕の分量になるだろう。というのは、仕上げをしているうちにわかったのだが、まさに経済学のもっとも抽象的な部分を述べるこの箇所では、あまり短くしすぎること（zu große Kürze）は、読者にとって事柄を消化できないようにしてしまうだろうからだ。だが他方、この第二の部分（diese 2te Abteilung）〔右の「第一の部分」が二冊になるその第二冊目のこと〕は同時に出版されなければならない。内的な関連からしてこれは必要だし、また全効果がこれにかかっているのだ」（傍点および〔　〕内―三宅）。

なお、ここで「第二の部分」と言っているのは「資本一般」の本来の部分として予定していた「第三章」であるが、マルクスが生前に公刊しえた『資本論』第一部はそのうちの最初の部分の「資本の生産過程」であったことは周知のとおりである。そしてこの『資本論』第一部が出版されたのはこののち約一〇年後の一八六七年であって、その分量は四九ボーゲンであった。一ボーゲンが印刷ページで一六ページ、計七八四ページ（初版）であった。

（6）　出版者ドゥンカー（Franz Gustav Duncker）はここでマルクスが出した条件に応じたのであるが――マルクスは一八五八年三月二九日付エンゲルスへの手紙のなかでこの三月一一日付でラサールに出した手紙にたいするラサールからの返事について記している――、「第一分冊」がドゥンカーの手に届けられたのは一八五八年の「五月末ごろ」ではなく、この「第一分冊」が、そしてじっさいにはその前のほうの序章的部分である『経済学批判』の印刷用原稿が完成したのは翌一八五九年の一月二〇日ごろであり、マルクスがこれを小包にして発送したのは同月二五日であった。

二　この原稿の執筆時期について

1　Grundrisse を書いた七冊のノートの個々の冊の執筆時期について、一九五三年版の（したがって一九三九年、四一年版の）『グルントリッセ』編集者はつぎのように記している。「第一冊は一八五七年一〇月にできたものである、だがマルクスによる日付の記載はない」（S. 34. 新ＭＥＧＡでは「一八五七年の一〇月半ばごろから一一月半ばごろまで」と推定している、――第二部第一巻、Apparat, Teil 1, S. 26, 32）。第二冊は「一八五七年一一月ごろ（新ＭＥＧＡでは「一八五七年一一月」――*a. a. O.* S. 34）、第三冊は「一八五七年一一月二九日から一二月半ばごろまで」、第四冊は「一八五七年一二月半ばごろから一八五八年一月二二日まで」、第五冊は「一八五八年一月二二日から一八五八年二月はじめごろまで」、第六冊は「一八五八年二月ごろ」、第七冊は「一八五八年二月末。三月および五月末―六月はじめ」と（S. 150）。

2　この終わりの時期についてもうすこし立ち入って見ておこう。

『グルントリッセ』編集者は、ノート第七冊の第一ページのところに「資本の章（つづき）」と書かれ、また「〔一八〕五八年二月末この冊に着手」と書かれている、と記している（S. 586）。他方、マルクスは三月二九日付のエンゲルスへの手紙で、「次回の手紙ではいよいよ（nun）第一冊の骨組み（ein Skelett des ersten Hefts）を君に知らせて、君の意見を聞かせてもらえるようにしたい。僕はこの二週間来またもひどく病気がちで肝臓薬を用いている」と述べ、つぎの四月二日付のエンゲルスへの手紙でつぎのように記している、――「僕は胆汁の件のため具合が悪いので、今週は〔この四月二日は金曜日。なお、前の手紙の三月二九日はこの週の月曜日である〕、『トリビュン』のための論説は

別として、考えることも、読むことも、書くことも、そのほかなにをすることも、できないでいる。……具合がよくなってふたたび指に握力を感じるまでは、ドゥンカーへ送る物の仕上げ（ausarbeiten）をはじめることができない。……つぎに示すのが第一の部分の簡単な概略（short outline of the first part）だ。……I．資本は四つの篇（Abschnitt）に分かれる。（a）資本一般（Kapital en général）（これが第一冊の題材（der Stoff des ersten Hefts）だ）。……1．価値。……2．貨幣。……3．資本。これは本来この第一冊のもっとも重要なところで、いちばん君の意見を聞きたい箇所なのだ。だが今日はもうこれ以上書けない。胆汁のせいでペンが運びにくいし、紙の上にうつむいていると目まいがする」（〔　〕内―三宅）。

この三月二九日付の手紙および四月二日付の手紙を見ると、マルクスは、前年一〇月から書いてきた下書き的な仕事――Grundrisse――がようやく一段落のところまできたとして、ないしこの仕事をこのあたりで一段落にしようとして、出版予定の書の第一冊の short outline をエンゲルスに書き知らせようとしたこと――つまり、エンゲルスに書き知らせることができるところまでともかく事が進んだのであること――、そしてからだの具合がよくなりしだい印刷用の仕上げをはじめようと考えていたこと、を知ることができる。

また、このあとの仕事の運びを同じく手紙によって見ると、マルクスはからだの具合が悪くて四月中、本来の仕事をすることができず、[7] 医師が転地をすすめたこともあって五月六日にマンチェスターに行き、エンゲルスのもとで二〇日すぎごろまで滞在していた。[8] そして五月下旬にロンドンに帰り、一週間ほどして五月三一日（月）付でつぎのような手紙をエンゲルスに書いている。――「最初の一週間は環境の変化にたいしてまた順応しなければならなかった。……やっと仕事ができるようになったので、さっそく印刷のための仕上げをはじめる（beginne sofort mit der

Ausarbeitung für den Druck)。……僕の不在のあいだにロンドンでマクラーレン（Maclaren）の通貨の全歴史にかんする一書が出版されたが、これは『エコノミスト』にのった抄録（Auszüge）から見ると第一級のものだ。……これを〔マクラーレンの書を〕僕は叙述に取りかかる前にもちろん読んでおかなければならない。……〔ここで、だがこの書の価格が高いので郵便為替で送金してくれないか、と記している〕……たぶん、この書のなかには僕にとって新しいことはなにもないだろうが、しかし……これを知らないで先に進むことは僕の理論的な良心が許さないのだ」（「　」内―三宅）。そしてノート第七冊では、これの書かれている最後のページは六三ページであるが、六二ページ目の初め三分の一ぐらいからマクラーレンの書についての『エコノミスト』一八五八年五月一五日号からの抜き書きが記されて同ページが終わっており、つぎの六三ページ目は前記のようにI Wertと題した一文が一ページたらず書かれている。

（7）エンゲルスにからだの具合が悪いことを告げつつ、the first partの――しかしその前半のほうだけについての――short outlineを書き送った一八五八年四月二日付の手紙のあと、マルクスはしばらくのあいだ手紙を書いていないが、四月二九日付でつぎのような手紙をエンゲルスに書いている。――「僕の長い御無沙汰の理由はひとことで説明できる、――書くことの不可能だ。この不可能は、言葉の比喩的な意味においてだけでなく、文字どおりの意味においてそうであった（そしてある程度まではいまでもそうなのだ）。『トリビュン』への数篇のやむをえない論説は妻に口述筆記をしてもらったが、それさえも強い刺激剤を用いることでやっとできたのだった。……医者は僕に旅行することをすすめた。……僕は明らかにこの冬、夜業をやりすぎたのだ（ich habe offenbar den Winter das Nachtarbeiten übertrieben）」。

この「夜業」について。Grundrisseは一八五七年一〇月から書きはじめられた原稿であるが、一八五七年一二月八日付エンゲルスへの手紙のなかでマルクスはつぎのように記している。――「大洪水の前にすくなくとも要綱（Grundrisse）だけでも明らかにしておきたいので、僕の経済学研究をまとめるのに夜どおし気ちがいのように仕事をしている（Ich arbeite wie toll die Nächte durch an der Zusammenfassung meiner Ökonomischen Studien）」。

一八五七年恐慌は八月下旬にアメリカでまず現われたのであったが、この報道がロンドンに着いたのは約二〇日後の九月半ばであった（三宅『マルクス・エンゲルス／イギリス恐慌史論』、上巻、二五七～八ページ参照）。そして恐慌がイギリスで荒れ狂い、イングランド銀行が一八四四年の同行法を停止したのは一一月一二日であった。マルクスはこの Grundrisse の仕事に取りかかる前、いわゆる「経済学批判序説」を一八五七年八月に書いていたのであって、Grundrisse はその仕事のつづきであるから、かならずしも、恐慌がはじまったのでこの仕事に取りかかった、ということではなかったであろう。だが、右の手紙にも見られるように、またすぐあとで見るラサールへの手紙にも見られるように、恐慌の進行はこの Grundrisse 執筆に着手し、これを進めるうえで、マルクスを大いに駆り立てる作用をしたらしい。さらに、同年一二月一八日付エンゲルスへの手紙。――「僕はまったくものすごく仕事をしている（Ich arbeite ganz kolossal）、たいてい朝の四時まで。仕事はすなわち二つある。第一、経済学概要の仕上げ（Ausarbeitung der Grundzüge der Oekonomie）。……第二、現在の恐慌。これについては――『トリビュン』への論説を別とすれば――ただ帳付けしているだけだが（Darüber……führe ich bloß Buch）、しかしこれがなかなか時間をとる」。さらにまた、同年一二月二一日付ラサールへの手紙。――「現在の商業恐慌は、僕が自分の経済学概要の仕上げにいまや真剣に着手し、また現在の恐慌についていささか準備するよう、僕を刺激した。僕は昼間［……］を生計の仕事のためにつぶすことを余儀なくされている。本当の仕事のために僕に残されているのは夜［だけ］なのだが（Es bleibt mir［nur］die Nacht für wirkliche Arbeiten über）、からだの不調がそこにまたじゃまに入ってくるのだ」（［　］内は紙が破損の箇所）。

等々、というように、マルクスにとってこの Grundrisse を書くのに使う時間は、夜しか残っていなかったらしい。そして一八五八年三月末ごろにはこの下書き的な仕事がようやく一段落するところまで進んだが、他方、過度につめた夜業の結果としてからだの不調がしだいに昂じ、四月にはこの注のはじめに掲げた四月二九日付エンゲルスへの手紙で書いているように、執筆の仕事ができないまでに健康を害するにいたったのであった。

(8)　マンチェスターではマルクスは乗馬などをして日をすごすとともに、既掲の一八五九年一月一三日と一五日とのあいだと推定されているエンゲルスへの手紙のなかで、出来上がった第一分冊の原稿が商品と貨幣の章しか含んでいないことについて「細目にわたって手を入れた部分（五月に君のところに行ったとき）はまだぜんぜん出てきていないことになるのだ」と述べていることから窺われるように、エンゲルスとこうした検討、話し合いもしたらしい。

だが、マンチェスターから帰って一週間ほどして書いた一八五八年五月三一日付エンゲルスへの手紙のなかで、後掲のように「原稿（これは印刷すれば分厚い一巻になるだろう）のなかではすべてのことがごちゃ混ぜになっており、ずっとあとのほうに置くべき箇所がたくさんあるのだ」と述べている。これで見ると、Grundrisse の原稿である七冊のノート自体はマンチェスターに持っていかなかったのではなかろうか、右の検討、話し合いも原稿にもとづいて検討し、話し合ったというのではなかったのではなかろうか、と推測される。エンゲルスが原稿自体を見ているならば、その分量や、状態を知っているはずであるから、マルクスがあらためてこのように書くことはなかったであろうからである。もしそうであるとすると、さきの手紙で「細目にわたって手を入れた部分（der im Detail verarbeitete Teil）」と言っているのは、じっさいに原稿に手を入れたという意味ではない、ということになると考えられる。

Werke 版の書簡集ではこのマンチェスター行きについて「注解（Anmerkungen）」を付してつぎのように記している。――「マルクスはおそらく（etwa）、一八五八年五月六日から二四日までマンチェスターのエンゲルスのところに滞在した。彼はそこで健康回復のためにスポーツをし、乗馬にふけった。同時に彼は『資本の章』の仕事をした（Gleichzeitig arbeitete er „Das Kapitel vom Kapital"）（注解三三二を見よ）」（Bd. 29, S. 696, Anmerkungen 292）。そして「注解三三二」は Grundrisse の「資本の章」について付して注解であるが、そこではつぎのように記している。――「……彼はこの労作を一八五七年一一月から一八五八年五月までの時期に書いた（schrieb）。一八五八年五月にマンチェスターのエンゲルスのところで滞在中、彼はこの章の仕事をした（er arbeitete an diesem Kapitel）。……」（*a. a. O.* S. 701）。

マンチェスターに原稿を持っていったとすると、さきの「手を入れた」というのが文字どおり原稿に手を加えたことになり、右の「注解三三二」のように――そこでそう記していると受けとられるように*――「資本の章」を書いた時期にこのマンチェスターに滞在していた時期を含めることも、成り立ちえないわけではない。だがこれにたいし、原稿を持っていかなかったとすると、「手を入れた」ことについての見方がちがってくることになる。原稿を持っていないのであるから、とおぜんのことながらマンチェスターでは原稿を書いていないことになる。そして「資本の章」の執筆時期は、『エコノミスト』からの抜き書きの前までは、一八五八年三月末どまりということになる。マンチェスターに原稿を持っていったか、いかなかったかは、それ自体ではどちらでもよいことであるが、こうしたかかわりが生じることになるのである。

* この「注解」で記していることは、この文脈では、「五月までに書いた」といってもこの「五月」はマンチュスターから

帰ってからのことであり、また「この章の仕事をした」といってもマンチェスターでは書く仕事はしていなかったのだ、という意味には読みとりがたいであろう。ついでながら、大月書店刊の『全集』第二九巻五七四ページの訳では、「一八五八年五月、マンチェスターのエンゲルスのもとに滞在中、彼はこの章を書いた」と訳している。この注解は文脈としては「書いた」と理解される文であるが、しかし訳としては「書いた」と訳してしまうのは原文に忠実な訳とはいえない。

注が長くなるが、なおまだすこし記しておこう。

マルクスは一八五八年五月三一日付ラサールへの手紙のなかでつぎのように述べている。――「……僕の医者は、僕が転地をし、第二にすべての知的労働をしばらくのあいだやめ、最後に主な療法として乗馬をする、ということが必要だとの断定をくだした。……とことんまで抵抗したあげく、僕はついに医者と家族との強要にしたがって、マンチェスターのエンゲルスのところへ行き、乗馬やその他の身体訓練に没頭し、四週間の滞在ののち完全に回復して、同地からやっとロンドンに帰ってきた。病気……になったのは、第一分冊の印刷のための仕上げにとりかかっていたときだったので、なおさら都合が悪かった(Die Krankheit――……kam um so ungelegner, als ich mich an die Ausarbeitung für den Druck des ersten Heftes gesetzt hatte)。これからはこの仕上げに熱中することにしよう」。この手紙は、マンチェスターから帰って一週間ほどして書いたさきのエンゲルスへの手紙と同じ日に書かれている。ここではマンチェスター行きに踏み切った事情がかなりくわしく説明されており、ここから見ても――そしてラサールへの手紙だということを考慮に入れて考えても――マンチェスターでは「知的労働」はあまりしなかったのではないかと推測される。

『グルントリッセ』編集者はその「序言(Vorwort)」のなかで、「健康を回復するために、とくにまた、いまやっている仕事をエンゲルスと論じ合うために(besonders aber um……durchzusprechen)、マルクスは一八五八年五月六日にマンチェスターへ行き、そこに五月二〇日ごろまで滞在した」と記している(S. XI)。既掲の一八五八年四月二日付エンゲルスへの手紙に見られるように、マルクスは the first part の short outline をエンゲルスに知らせ、そして「資本」の部分については「これは本来この第一冊のもっとも重要なところで、いちばん君の意見を聞きたい箇所なのだ」が、今日はからだの具合が悪くてもう書けないと記していた。またマルクスは一八五八年三月上旬に、機械設備の更新や流動資本の使い方についてエンゲルスの実務的経験を問い合わせていた。こういうことからみても、マルクスはマンチェスターでエンゲルスに会ったときこれらについていろいろ話をし、意見を聞きたいと思っていたであろう。だがしかし、『グルントリッセ』編集者の言うよう

に、これがマンチェスター行きの一つの目的だったとまで考えるのは、右のラサールへの手紙で見るかぎりでは、誤認ではなかろうかと思われる。

なお、マンチェスターへ行ったのが五月六日であることは一八五八年五月一日付マルクスからエンゲルスへの手紙で分かるが（ロンドン発午後二時半、マンチェスター着午後七時の汽車）、帰ってきたのが何日であるかははっきりしない。前掲の *Werke* 版 Bd. 29 の「注解二九二」で「おそらく」として「二四日」と記しているのは（ついでながら、大月書店刊の『全集』第二九巻五六八ページの訳ではここの「おそらく」の訳が欠落している）、たぶん、既掲の五月三一日付エンゲルスへの手紙で「最初の一週間は環境にたいしてまた順応しなければならなかった。……〔元気になるには〕ちょうど今日まで日にちがかかった（Ich habe exakt bis heute gebraucht）」（〔　〕内―三宅）と記しているところから、この日の一週間前と見たのであろう。したがってそうはっきりしたものではない。またさきの五月三一日付ラサールへの手紙のなかで「四週間の滞在ののち（nach vierwöchentlichem Aufenthalt）」となっているが、これはマルクスの誤記か、手紙解読のまちがいである。

以上長い注記になったが、マンチェスター滞在中原稿に手を入れたかどうかの件については、筆者は Grundrisse の手書き原稿は見ていないのであって、もし原稿にそうした形跡がはっきり認められるならば――上掲のマルクスのいくつかの手紙からみて納得がゆかないとしても――問題はかんたんに消えてしまうことになる。念のため。

さて以上のいくつかの手紙を綴り合わせてみると、三月二九日にエンゲルスへ手紙を書いたころからマルクスは『トリビュン』以外の仕事はできないでいて、マンチェスターから帰ってやっと仕事ができるようになり、ここで「印刷のための仕上げ」をはじめることとした、ということになる。そうすると、ノート第七冊の六二ページの『エコノミスト』からの抜き書きの前までのところは、三月中に書かれたものであることが、ほぼたしかであるといえよう。そして、五月下旬にマンチェスターから帰って五月一五日号の『エコノミスト』を読み、六二ページの残りの部分に抜き書きをしるした、ということになる。

3　そうするとあとは、ノート第七冊の最後の六三ページに「I　価値」として一ページたらず書かれているもの

であるが、これはいつ書いたものであろうか。

マルクスはさきの五月三一日付のエンゲルスへの手紙のなかで、前掲のマクラーレンの書について述べている箇所につづいて、つぎのように書いている。――「君のところには、金曜日のために〔六月四日の金曜日に『トリビュン』へ送る論説のこと〕、インドにおけるイギリス軍の状態にかんするなにか一般的なこと、および臆測的なことを書くのに十分な材料があるのではないだろうか。もしそうならたいへんありがたいのだが。というのは、僕のほうは僕自身の原稿に目を通すのに（das Durchlesen meines eignen Manuskripts）ほぼ一週間かかるだろうからだ。つまり、いまいましいことには、原稿（これは印刷すれば分厚い一巻になるだろう）のなかではすべてのことがごちゃ混ぜになっており、ずっとあとのほうに置くべき箇所がたくさんあるのだ[9]（vieles, was erst für viel spätere Teile bestimmt ist）。だから、僕は自分のために一つの索引（index）をつくって、僕がまず著作に取り入れるべきものがどのノートおよびどのページですぐに見出されるかが分かるようにしなければならないのだ」（〔　〕内―三宅）。

ここで言っている「索引」が、『グルントリッセ』S. 855～867 に収録されている「七冊のノートへの索引（Index zu den 7 Heften）」である。マルクスは Grundrisse を書きはじめるより前の一八五七年八月に「序説（Einleitung）」をMという記号をつけたノートに二二ページにわたって書いたが、この同じノートMの二三ページから三三ページにこの「索引」を書きしるした。そしてこのあとマルクスは別のノートに、「印刷のための仕上げ」の原稿を書いていった（一八五八年五月三一日付エンゲルスへの手紙の、さきの九八ページ末に掲げた箇所参照。といってもこの原稿もまだ印刷用原稿にはなるにいたらなかったのであるが）。これが『グルントリッセ』S. 871～947 に編集者が〔Fragment des Urtextes von „Zur Kritik der politischen Ökonomie"〕（〔『経済学批判』の原本文の断片〕）という表題をつけて収録している

ものである（これらの Index および Urtext についてはのちの項でまた見る）。

マルクスはこの「索引」をつくりはじめた日付をノートMの当該箇所に記していないが、第一に、五月三一日(月)付の手紙でこれをつくることを理由にしてエンゲルスに六月四日（金）に発送する『トリビュン』論説を依頼していることから見て[10]、また第二に、『トリビュン』論説は船便の都合上だいたい火曜日か金曜日に発送していたのであるが、つぎの週には六月八日の火曜日にも一一日の金曜日にもマルクス自身がそれぞれ論説を書き送っているのであって（*Werke*, Bd. 12, S. 497, 506）、そのことから見ても、マルクスはこの「索引」づくりを五月三一日付の手紙を書いたころから実際にはじめ、六月の比較的早い時期にこれを終えたのではないかと推測される。

五月三一日付の手紙で「さっそく印刷のための仕上げをはじめる」と記し、そこで「索引」づくりについて記しているところから見て、五月三一日以後の仕事は「印刷のための仕上げ」の仕事であり、この「印刷のための仕上げ」の仕事はまず「索引」づくりであった、ということはまちがいないであろう。またこの「索引」づくりはノート第一冊から第七冊までの一連の原稿を書いたあとに行なったものである、ということもまちがいないことであろう。そしていま、さらにこの「索引」づくりがなされたのが右のような時期であったとすると、ノート第七冊の最後の六三ページの「I 価値」を書いたのは、五月三一日付エンゲルスへの手紙を書く前であったであろう、ということになる。そういうふうに推測するほかないことになるのである。

(9) ここが、さきにマンチェスターに原稿を持っていかなかったであろうという推測のもとになった箇所である。

(10) エンゲルスは当時、インドでのイギリス軍の行動についてときどき『トリビュン』に論説を書いていたが、このマルクスの依頼に応じて六月四日一文を書き送り、これは一八五八年六月二六日の『トリビュン』に社説として掲載された（*Werke*, Bd. 12, S. 493～6 所収）。

4　以上、念のためにたしかめてみようとして、マルクスの当時の手紙に当たりながら見てきたが、『グルントリッセ』編集者も新ＭＥＧＡ編集者も精粗の差はあるとしても同様な操作をしているわけである。したがって、この執筆時期にかんしてそれほどちがった結論が出てくることはもともと期待していなかったし、また実際それほどちがったことが出てきたわけではない。（さきに、マンチェスターで原稿に手を加えたかどうかということを問題としたが、『グルントリッセ』編集者の「序言」でエンゲルスと論じ合うことをマンチェスター行きの目的の一つに挙げていることはいま措くとして、執筆時期そのものについては、この点、『グルントリッセ』では *Werke* の Anmerkungen でのような書き方はしていない――*Werke* のこの巻は一九六三年刊であるから『グルントリッセ』よりもずっとあとのものなのであるが――）。

たとえば、さきに、ノート第七冊の六二ページの『エコノミスト』からの抜き書きの前までのところは、一八五八年の三月中に書かれたものであることはほぼたしかであるといえよう、と記しておいたが、『グルントリッセ』編集者もその「序言」のなかで、「主として夜間に、マルクスは一八五七年一〇月から一八五八年三月までに、七冊のノートに、ここに公刊される大きな原稿を執筆した」(S. VII)、「マルクスが一八五八年三月末に過労のため病気になったとき、仕事は粗稿の形ではでき上がっていた (die Arbeit war im Rohen fertig)[11]」(S. XI) というように記している。

(11)　ここの im Rohen という言い方には、さきのマンチェスター行きのことがあるのでちょっとひっかかりを感じる。しかし『グルントリッセ』編集者は、一八五八年一一月二九日付エンゲルスへの手紙（この手紙についてはのちにまた見る）のなかでマルクスが Rohentwurf という語を用いていることにもとづいて、七冊のノートの原稿の呼び名のなかに „Grundriss der Kritik der politischen Ökonomie. (Rohentwurf). 1857/1858" というように Rohentwurnf という語をつけ加えているほどなのであって（「序言」、S. XIV）、そのことを考慮すると、右のひっかかりは一応解消する、としてよいであろう。

しかしまた、まったく同じでもないのであって、さきに掲げたように『グルントリッセ』ではノート第七冊の執筆時期を「一八五八年二月末。三月および五月末―六月はじめ（Ende Februar. März und Ende Mai / Anfang Juni 1858）」と記しているが、さきの私の推測だと、ノート第七冊の最後の六三ページの「I　価値」を書いたのは五月三一日付エンゲルスへの手紙を書く前であったであろうということになる。したがってここは「一八五八年二月末から三月末ごろまで。および五月末」と記してしかるべきではないかということになる。

『グルントリッセ』編集者がここに「六月はじめ」と記したのは、ここだけについて見れば、つぎのように考えてのことではなかったかとも見受けられる。すなわち、五月三一日にエンゲルスへ既掲のような手紙を書いているが、ノート第七冊の六二、六三ページを書いたのが五月末とは断定しがたい、六月に入っていたかもしれない、そう考えて「六月はじめ」と記した、つまり五月末からちょっとズレているかもしれないと考えてこう記しておいた、というようにも見受けられる。そういうことであれば、こう記しておくことがとくに誤りだともいえないであろう。

しかし、『グルントリッセ』編集者はその「序言」のところでつぎのように記している。――「ようやく五月三一日にマルクスは『仕事ができるようになった』と感じ、『さっそく印刷のための仕上げ』をはじめた。／まず第一に（zunächst）彼は六月はじめに、ちょうど終わった粗稿の本文に目を通し、ノートMの末尾のところにノート第一―第七冊のなかで最初の二章に関係のあるものをすべて書きとめた。……だがマルクスは一八五八年の夏には、『索引』と価値の章の冒頭との執筆までしか進まなかった」（S. XI〜XII）。つまり、この「序言」では、五月三一日付エンゲルスへの手紙で記していた「印刷のための仕上げ」を「六月はじめ」からはじめ、そうした仕事として「索引」と「価値の章の冒頭」とを書いた、という説明をしているのである。

さきの、ノート第七冊の執筆時期を「一八五八年二月末。三月および五月末―六月はじめ」と記している箇所での「六月はじめ」が、五月末からちょっとズレているかもしれないと考えたからであったにとどまらず、右の「序言」での説明のようなことを念頭において「六月はじめ」と記していたのだったとすると――そしてこれは同じ書のなかであるから対照してそう見るほうがむしろ当然だということになるのであるが――、これはだいぶおかしなことだと言わざるをえないことになる。さらに、「序言」でのこの説明のように「六月はじめ」から「索引」づくりを「まず第一に」はじめ、また「価値の章の冒頭」を書いたとすると、「価値の章の冒頭」つまりノート第七冊六三ページの箇所を書いたのは「六月はじめ」よりもさらにあとであったかもしれない、というような混乱的なことにもなってしまうであろう。いずれにしても、五月三一日以後の仕事は「印刷のための仕上げ」であり、この五月三一日以後の「印刷のための仕上げ」の仕事はまず「索引」づくりであった、というところから「I 価値」を書いたのは五月三一日以前であろうとしたさきの私の推測とは、かなりはっきりと抵触してくることになる。(12)

(12) 私は、「I 価値」はノート第七冊のそれまでのところとちがって、マルクスとしては「印刷のための仕上げ」をはじめようとして書きはじめ、それを途中でやめて「索引」づくりをすることにしたのではなかろうか、と見ているのであるが、そのことについてはあとの項でまた述べる。上で述べているのは、五月三一日以後の「印刷のための仕上げ」の仕事であって、それにはこの「I 価値」は入っていない、これを書いたのはそれより前なのだ、ということなのである。

右は『グルントリッセ』について見たのであるが、つぎに新MEGA第二部第一巻第一冊のほうを見てみよう。

新MEGAではその「序文（Einleitung）」のなかでたとえばつぎのように記している。――「一八五七年一〇月から一八五八年五月までに、マルクスは五〇ボーゲンをこえる大きな範囲をもつ原稿 „Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie“ を執筆した。これはのちの『資本論』の最初の粗稿（der erste Rohentwurf）をなすもの

である」(Text, Teil 1, S. 14*)。このように、『グルントリッセ』の「序言」では一般的に言うときさきに見たように「一八五七年一〇月から一八五八年三月までに」と記していたが、新ＭＥＧＡの序文ではそういう説明の仕方をとくにしていないとともに、一八五八年の「六月はじめ」とすることもしていなく「五月」としている。

また、右の「序文」がのっているのは第二部第一巻第一冊の Text の冊のほうであるが、同じく第一巻第一冊の Apparat の冊のほうでは、Grundrisse の部分に入った最初のページの表題のところに「一八五七年一〇月半ばごろから一八五八年五月末まで (Etwa Mitte Oktober bis Ende Mai 1858)」と執筆時期を記している (S. 26)。ここでも「六月はじめ」とすることはしていない。そしてつぎのように述べている、――「ノート第一冊の終わりのところでマルクスはロンドンの新聞 „Weekly Dispatch" の一八五七年一一月八日号からの引用文を掲げており、またノート第三冊の八―四五ページの日付をマルクスは『一一月二九、三〇日および一二月』と記している。このことから、ノート第一冊は一八五七年一〇月に書きはじめられたという結論がえられる。一八五八年五月三一日付エンゲルスへの手紙のなかで、マルクスは、大きな原稿にいま一度目を通してこれへの索引を作成したいと述べている。したがってこの時点で原稿を書く仕事はすでにやめられていたのであって、マルクスは右と同じ手紙のなかで、『さっそく印刷のための仕上げをはじめる』とエンゲルスに告げていた」(*a. a. O.* S. 26)。ここで「五月末」としている根拠は、さきの私の推測の根拠と同じである。

「六月はじめ」の件はここまでとし、つぎにこんどは新ＭＥＧＡで記しているノート第一冊に着手した時期、つまり Grundrisse に着手した時期のほうについて見てみよう。Apparat では右のように表題のところで「一八五七年一〇月半ばごろ」と記している。『グルントリッセ』では既掲のように「第一冊は一八五七年一〇月にできたもので

ある、だがマルクスによる日付の記載はない」と記していた(S. 34)。新MEGAではこの「一〇月」のはじまりを「一〇月半ばごろ」と限定する改定をしているわけである。ところで、Apparatでの右の説明は――これは表題の下にはじまる文の冒頭のところで記しているものである――、この改定ということを考慮に入れなくても、すぐ上の表題のところで「一〇月半ばごろ」と記している以上、なぜ「一〇月半ばごろ」と考えたかを説明するものでなくてはならない。ところがそこでは二つの材料を挙げ、「このことから、ノート第一冊は一八五七年一〇月に書きはじめられたという結論がえられる(Daraus läßt sich schließen, daß das erste Heft im Oktober 1857 begonnen wurde)」としている。これは記述の運びとしてはおかしいのであって、おそらくこの im Oktober は etwa Mitte Oktober と書くところを書き誤ったのではなかろうかと思われる。

しかし、かりに書き誤ったのでないとしても、ここで二つの材料を挙げていることは、なぜ「一〇月半ばごろ」と推測したかを説明しているものであるはずである。そこでいまこれを見てみよう。前掲のようにこの説明では、一つは「ノート第一冊の終わりのところ」で――これはこの冊の四六ページである――「ロンドンの新聞 „Weekly Dispatch“ の一八五七年一一月八日号からの引用文」があることを挙げ、いま一つは、ノート第三冊の八ページ――Grundrisse の原稿としては八ページ目からはじまっている――が一一月二九日からはじまっていることを挙げている。この二つを挙げているのは――Apparat では Grundrisse の前の「序説 (Einleitung)」のところで執筆速度を計算している(S. 16)ことから見ても――、その間の執筆速度からノート第一冊のはじまりを推測してみたのだ、という意味であろう。そこで計算してみると――。

ノート第一冊の終わりは四八ページであり、第二冊の分量は二八ページ少々であるから、四六〜四八ページの三ペ

ージ、プラス二八ページ、計三一ページ。これを一一月八日から二八日までの二一日間に書いたことになる。だが分量をはかるにはノートのページ数よりも印刷したさいのページ数のほうがより精確であろうから――じつははじめノートのページ数で一日平均速度を出し、ノート第一冊の一～四五ページをこの速度で書いたとすると何日かかったと計算したのであるが、そうすると三〇日半ほどとなり、「一〇月半ばごろ」とは少々ズレが生じることになった――、『グルントリッセ』での印刷ページで当たってみると、ノート第一冊の一一月八日号新聞からの引用文があるのはS.127であり、第二冊の終わりはS.200であって、その間七四ページ。他方、ノート第一冊のはじまりはS.35, したがってS.126までのページ数は九二ページ。そこで、七四ページを二一日で書いたとすると、九二ページを書くのに何日かかったか、つまり74：21＝92：Xを計算すると、X＝26.1となる。つまり二六日少々となる。したがってノート第一冊の書きはじめは一一月八日の二六日前、一〇月一三日ごろということになる。したがって「一〇月半ばごろ」ということになる。

新MEGA編集者は二つの材料を挙げているだけで計算を示していない。「一〇月」ということだけであれば二つの材料を見ただけで目の子算で出てくるのであるが、おそらく右のような計算をして「一〇月半ばごろ」という推測をしたのであろう。このように他の部分での執筆速度から別の部分の執筆期間を推定することは、あくまで推定にとどまるものではあるが、しかしともかく計算してみると「一〇月半ばごろ」ということになる。そしてさきに記した誤記の点についていえば、この二つの材料を挙げているのは、やはり、「このことから、ノート第一冊は一八五七年一〇月半ばごろに書きはじめられたという結論がえられる」とするためであった、と考えられるのである。

なお、ノート第一冊四六ページに一八五七年一一月八日号の新聞からの引用文があるというさきの Apparat での

指摘は、『グルントリッセ』で「第一冊は一〇月にできた（Heft I ist im Oktober entstanden）」としていたのにたいして、この冊の終わりの時期についても改定していることになる。そして Apparat でノートの個々の冊について記している部分では、ノート第一冊の執筆時期を「一八五七年一〇月半ばごろから一一月半ばごろまで（Etwa Mitte Oktober bis etwa Mitte November 1857）」と記している（*a. a. O.* S. 32. 既掲）。四六ページのところを書いたのは早くて一一月八日であるが、かりに一一月八日に書いていたとすると、前記の執筆速度だと四八ページを終えたのが九日か、一〇日となる。そこでだいたい一一月半ばと見ることにしたのであろう。

なお最後に一つ。マルクス、エンゲルス間の手紙を見ると、一八五七年九月半ばから月末にかけてきわめて頻繁に手紙が書かれているが、これらの手紙では一八五七年恐慌に触れておらず、マルクスの手紙のなかでこの恐慌について記している最初の手紙は、ようやく一〇月二〇日付の手紙である（三宅『マルクス・エンゲルス／イギリス恐慌史論』、上巻、二五五ページ、二六一～二ページ参照）。手紙でのこうした状況から見ると、そしてさきに見たように（注（7））マルクスが Grundrisse の執筆に着手し、これを進めるうえで、恐慌の進行が大いに駆り立てる作用をしたらしいことを考え合わせると、この点からいってもノート第一冊の書きはじめは、一〇月といっても半ば以後の一〇月中旬というところが、おそらく事実に近い線ではないかと見受けられる。

三　この原稿の執筆速度について

右の二の終わりで、ノート第一冊の書きはじめの時期を推定するために、新ＭＥＧＡで挙げている材料にしたがって執筆速度を計算してみたが、新ＭＥＧＡのこの同じ第二部第一巻第一冊の Apparat では右より前の「序説」につ

いて記している部分において、マルクスが Grundrisse にとりかかる以前に書いたこの「序説」の執筆時期を推定するために――これの書きはじめは「ロンドン。〔一八〕五七年八月二三日」という日付がマルクスによって書かれているが終わりの日付がないので――、Grundrisse を書いたときのマルクスの執筆速度を利用しようとしてつぎのように述べている。「約二印刷ボーゲンの分量である序説の本文は、明らかに、あまり長い中断はせずに書かれた。これにまもなくつづいて書かれたノート七冊からなる一八五七―五八年の大きな経済学原稿（„Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie"）は、われわれに執筆速度を探索する可能性を与えてくれる。というのは、若干の箇所に筆者による日付が入っているからであって、たとえばノート第四冊の二四ページに一八五八年一月、またノート第七冊の五ページに一八五八年三月と記してある〔いずれもそこで月が変わったという日付であるから、そこがその月の最初の日ということになる〕。ここから、本文一一一ページ、これは約二〇印刷ボーゲンをなしているが、これが八週間〔くわしくは五九日である〕で書かれたということが出てくる。平均すると、一週間で二・五ボーゲンとなる。したがって、マルクスは序説を書くのに一週間以上は要しなかったことになる。八月二三日に書きはじめたとすると、彼が執筆をやめたのが八月の終わりごろの日であったことはほぼたしかである（er brach die Niederschrift sehr wahrscheinlich in den letzten Tagen des August ab)」（*a. a. O.* Apparat, Teil 1, S. 16. 〔 〕内―三宅。ここの一部は前に注（5）で見た）。

右のように計算して新ＭＥＧＡでは「序説」は八月中に書かれたとして、従来九月の半ばごろまでに書かれたと見られていたのを改定している。従来は、たとえば一九五三年版の『グルントリッセ』では「この序説は、Ｍという記号がついていて、一八五七年八月二三日にはじめられ、ほぼ九月半ばに（ca. Mitte September）筆をおいた一冊のノ

ートのなかに書かれている」(S. 4)と記していたのだった。[13]

(13) Grundrisse を書いていたときにはマルクスは、既掲の一八五七年一二月八日付や一二月一八日付のエンゲルスへの手紙に見られるように、恐慌にともなって社会的動乱が起きることを予想し、それが起きる前になんとか書き上げておきたいと「気ちがいのように(wie toll)」仕事をしていたのであった。だが「序説」の八月下旬当時には、アメリカではすでに大きな破産が生じていたが、既述のようにロンドンにその報が届いたのは九月半ばであった。したがって、執筆速度も「序説」のときと Grundrisse のときとでは若干ちがったのではないかと想像されるし、また「序説」は途中で打ち切った形でやめられているが、これは九月半ばからあいついで報ぜられてきたアメリカでの恐慌、そしてこれはアメリカと密接な関係にあったリバプール、グラスゴーにまず影響を与えてきたが、こうした事態と関係があったのではないか、そしてこのあと一〇月から Grundrisse の執筆への移行となったのではないか、というようにも想像されよう。そしてそう想像すると、「序説」を書くことをやめたのを「九月半ばごろ」と見るのも——従来九月半ばごろとしていたのがどういう根拠からそう見ていたのか知らないが——、まんざら捨てたものではないとも考えられよう。

だがしかし、さきに執筆時期の終わりのところで記したように、当時のマルクスの手紙を見ると、九月半ばごろには恐慌についてなにも触れておらず、これについて記しているのは一〇月二〇日の手紙が最初である。こうした手紙の状況から見ると、右の想像はおそらく当たっていないと考えたほうが、事実に近いであろう。

なお、新MEGA編集者はさきのように、「序説」は「明らかに(offensichtlich)、あまり長い中断はせずに(ohne größere Unterbrechung)書かれた」とし、そのことを前提として、この「序説」のあとまもなく書かれた Grundrisse での執筆速度から「序説」を書いた期間を推論しているのであるが、なぜ「あまり長い中断はせずに」書いたことが「明らか」であるのか、その理由についてそこではとくに述べていない。しかしそのあとのほうの箇所で、「序説」の原稿について、語の綴りの省略の仕方や書き誤りが訂正されていないことなどを挙げ、「すべてこれらのことは、マルクスが原稿をきわめて速く(sehr schnell)書き、そして後日読み返しをして誤りを直すことをしなか

った、ということを示している」という所見を記している（a. a. O. S. 18）。こうしたことが、「あまり長い中断はせずに書かれた」と判断した理由であったのであろう、と見受けられる。原稿がきわめて速い速度で書かれていることと、中断があったかどうかということとは、事柄としては別の事柄なのではあるが。

ところで、「序説」についてしるすことは本稿では別の項を予定しているのであって、いまここで見ようとしているのは Grundrisse の執筆速度のほうである。そこで本題に戻ろう。

前掲のように、ノート第四冊の二四ページのところが一八五八年一月一日、ノート第七冊の五ページのところが一八五八年三月一日、この間のノートでのページ数一一一ページ。そして新ＭＥＧＡではこの分量は約二〇ボーゲンであり、これを八週間で書いたとして週平均「二・五ボーゲン」という計算をしている。しかしボーゲンでの計算はわが国ではなじみが薄いので、ここでは『グルントリッセ』での印刷ページによって見ることとしよう。

『グルントリッセ』の印刷ページで見ると、ノート第四冊二四ページでの一八五八年一月からの箇所はS. 322の三〇行目からであり、第七冊五ページの同年三月からの箇所はS. 599の二行目からとなっている。この約二七六ページの分量をこの間の日数五九日で割ると、一日平均約四・七ページ弱となる。つまり、『グルントリッセ』の組みページで、この間一日も休むことなく書いたとして、一日平均五ページ弱書いていたことになる（なお、ノートのページ数で見ると、一一一ページであるから一日平均一・九ページ弱ということになる）。

さきにノート第一冊のはじまりの時期を「一八五七年一〇月半ばごろ」とする推定をたしかめる計算をしてみたが、そこでの第一冊の終わりのあたりから第二冊末までの『グルントリッセ』での印刷ページ数は九二ページ。これを二一日で書いたとすると、一日平均約四・四ページ弱となる。つまり一日平均四ページ半ほどであったことになる

（ノートのページ数で見ると三一ページ、一日平均一・五ページ弱となる）。

ついでに、試みにいま一つ別の箇所について見てみよう。さきに新ＭＥＧＡで挙げていたようにノート第三冊の八ページに一八五七年一一月二九日という日付があるが、ここは『グルントリッセ』ではS.200の三四行目である。これと、ノート第四冊二四ページでの一八五八年一月からの箇所S.322三〇行目とのあいだをとると、この間一二二ページ。これを三三日で割ると、一日平均約三・七ページ弱ということになる。つまり一日平均四ページほどである（ノートのページ数だと六一ページ、一日平均一・八ページ強）。

いまこれをノートの冊順に並べてみると、ノート第一冊〜第二冊のあたりが一日平均四ページ半、第三冊〜第四冊半ばが四ページ、第四冊半ば〜第七冊はじめが五ページ。ざっとこういうことになる。

ここまできたので、事を完結させるためにさらに第七冊の残りの部分も見ておこう。三月一日から第七冊五ページ目がはじまっており、ここは前記のように『グルントリッセ』ではS.599の二行目。そして、既述のように第七冊六二ページ半ばのマクラーレンの前までが一八五八年の三月中に書かれたと見られるのでここまでをとると、ここはS.761の二六行目。この間のページ数一六二・五ページほど。これを三一日で割ると五・二ページ強となる（ノートのページだとこの間五七・五ページ、一日平均一・九ページ弱となる）。からだの具合がだいぶ悪くなってきたはずの一八五八年三月においても、意外に執筆速度が下がっていない。そしてかえって、その前の一月、二月の一日平均四・七ページにくらべて半ページほどふえ、全期間中いちばん速く書いていたことになる。書いていた計算になる。

さて、このへんでだいたい全体の様子がわかったことになるが、電卓を使いついでに、もうすこし数字の計算を試みておこう。

前掲のように新ＭＥＧＡではノート第四冊の二四ページから第七冊の五ページまでの分量は「約二〇印刷ボーゲン」であるとし、週平均「二・五ボーゲン」という計算をしていた。本稿の注(5)のところで、ここからGrundrisseは全体では五〇ボーゲンをこえていると推測したが、新ＭＥＧＡの「序文」でも前掲のように「五〇ボーゲンをこえる」としている(Text, Teil 1, S. 14*)。どの程度こえているかをもうすこしくわしく見ると、右の約二〇ボーゲンとしている部分は『グルントリッセ』では前記のように二七六ページ分であり、Grundrisse 全体――ノート第七冊のマクラーレンの前まで――は七二七ページ分であるから、計算すると五五ボーゲン弱となる。

また、ノート第一冊を一八五七年一〇月一五日から書きはじめたとすると、五八年三月末までで計一六八日。この間一日も休まずに右の七二七ページを書いたとすると、一日平均四・三ページとなる（さきの、全体を四つに区切ったそれぞれの速度の平均だと四・五ページとなる）。

なお、ノートでGrundrisseを書きしるしたページは、第一冊が四八ページ、第二冊が二九ページ、第三冊が三八ページ、第四冊が五三ページ、第五冊が三三ページ、第六冊が四四ページ、第七冊が六二ページ（マクラーレンの前まで）であって、計三〇六ページである。そしてこれを同じく一六八日で割ると、一日平均一・八ページほどになる。

もうこのへんでやめとしよう。さて以上見てきたような執筆速度――これを簡単にいえば『グルントリッセ』の印刷ページで一日平均「だいたい四ページ半」と見てよい――は、書かれたものの内容からいってそれだけでもかなりの仕事の密度であるが、しかもマルクスは当時、この原稿を書くのに一日を自由に使えたのではない。さきに注(7)で挙げた手紙に見られるように、この仕事をするのにマルクスに残されていた時間は夜の時間だけであった。したがって、右で見た一日の執筆速度というのは、実際には一晩の執筆速度であったことになる。

さきに掲げたようにマルクスは一八五七年一二月当時つぎのような手紙を書いている。――「僕はまったくものすごく仕事をしている、たいてい朝の四時まで。仕事はすなわち二つある。第一、経済学概要の仕上げ。……第二、現在の恐慌。これについては――『トリビュン』への論説を別とすれば――ただ帳付けをしているだけだが、しかしこれがなかなか時間をとる」(14)（一八五七年一二月一八日付エンゲルスへの手紙。注（7）で既掲）。

（14）なお、この手紙のここの箇所につづいて、マルクスはこの「現在の恐慌」について春ごろエンゲルスと一緒に「パンフレット（Pamphlet）」をつくってみたらどうかと考えているとし、「僕は大きな三冊を計画している、――イギリス、ドイツ、フランスだ（ich habe 3 große Bücher angelegt――England, Germany, France）」と書いているが、ここを大月書店刊の『全集』第二九巻一八七ページの訳では、「僕は大きなノートを三冊つくった」と誤訳されている。すぐあとで見る「恐慌ノート」と関連があることなので付記しておく。

マルクスがこの手紙を書いていたときは、さきに見たノート第三冊～第四冊半ばのところを書いていた時期である。この、ノート第三冊の八ページがはじまっている一八五七年一一月二九日から、ノート第四冊二四ページでの一八五八年一月一日までの期間、つまり五七年一一月二九日～一二月三一日のあいだで見ると、マルクスは『ニューヨーク・トリビュン』にたいしてつぎのように毎週金曜日に恐慌論説を書き送っていた。一二月四日に「〔ヨーロッパの金融恐慌〕」、一一日に「イギリスの生産と襲いかかっている産業恐慌とについての論説」、一八日に「〔ヨーロッパの恐慌〕」、二五日に「フランスの恐慌」（〔　〕のついた表題は *Marx Engels Werke* 編集者のつけたもの。上のうち一二月一一日に送った論説は『トリビュン』に掲載されなかったとされている、――三宅『マルクス・エンゲルス／イギリス恐慌史論』、上巻、二六四ページ参照）。

また、右の一二月一八日の手紙で「これがなかなか時間をとる」と記しているように、マルクスは一八四七年恐慌

以来待ちに待っていた恐慌がいよいよ到来したということでこの恐慌の経過を注視し、新聞や『エコノミスト』からの切り抜きを貼ったノートをつくっていた。表紙に Book of the Crisis of 1857 と記したノート。この「一八五七年の恐慌ノート」をマルクスがつくりはじめたのは一八五七年一一月七日ごろとみられ、だいたいにおいてノートの前半部分は一一月七日から一二月一一日まで、後半部分は一二月一一日から一二月末までのものが記録されている。なおこれにつづいてマルクスは表紙に The Book of Commercial Crisis January 1858 と記した「一八五八年の恐慌ノート」をつくっていたが、これは一八五八年二月一七日（木曜日）のイングランド銀行週報の記録が一ばん最後のものとなっている（川鍋正敏「マルクスの『恐慌ノート（一八五七／五八年）』」、『立教経済学研究』、一九六六年七月刊、二五一～六九ページ。なお前掲三宅『恐慌史論』、上巻、三三五～七ページ参照）。

また、前記のように新ＭＥＧＡで Grundrisse の執筆速度を見る材料として挙げているノート第四冊二四ページの一八五八年一月から第七冊五ページの一八五八年三月までの期間、つまり一八五八年一月のはじめから二月末までの約八週間においても、マルクスは『トリビュン』に六本ほどの論説を書き送っており、そして右の「一八五八年の恐慌ノート」をつけていたわけである。

このように昼間は別の仕事に使い――『トリビュン』への論説で生計を維持していたのだった――、夜の時間で Grundrisse を書いていったとすると、一晩で『グルントリッセ』の版で平均「だいたい四ページ半」というのは、かなりの速さである。[15] だがマルクスはノート第六冊を書いていたころの一八五八年二月二二日付ラサールへの手紙のなかで、つぎのように述べている。――「経済学の仕事がどうなっているかを（wie es mit der ökonomischen Arbeit steht）、君に知らせたい。僕は数カ月来じっさい、最後の仕上げ[16]にとりかかっている（Ich habe in fact die finale

Ausarbeitung seit einigen Monaten unter der Hand)。だが事の進みはきわめて遅々たるものだ（Die Sache geht aber sehr langsam voran)。というのは、多年にわたって研究の主要目的として諸対象が、最後にそれらと決着をつけねばならないとなると、たえずまた新たな側面を現わして、新たな熟考を必要にさせるからだ（weil Gegenstände ……immer wieder neue Seiten zeigen und neue Bedenken sollitizieren)。そのうえ、僕は自分の時間の主人ではなくて、むしろその下僕なのだ。僕自身のためには夜しか残っていなく、しかも肝臓病の頻繁な再発がこの夜業をまた妨げるのだ」。

原稿がかなりの速さで書かれていると見受けられるにもかかわらず、そして、このあと一カ月と少々で第一冊のこの下書き的な仕事が一段落し、ないしともかく一段落にしようとして、三月二九日付エンゲルスへの手紙で「次回の手紙ではいよいよ第一冊の骨組みを君に知らせて、君の意見を聞かせてもらえるようにしたい」（既掲）と書くにいたったにもかかわらず、右のように「事の進みはきわめて遅々たるものだ」と述べているのは、マルクスがこのGrundrisse に着手したときに予想していた、内容のうえでの仕事の進みと、実際のそれとのズレを語っているものといえよう。[17] なお、ここで「たえずまた新たな側面を現わして、新たな熟考を必要にさせる」と言っている点については、のちにまた取り上げることとする。

（15）これをより実感的にするために、『グルントリッセ』の印刷ページでだいたい四ページ半は大月書店刊の邦訳のページ数にするとどの程度であるかというと、だいたい五ページ前後である。そしてこれを四〇〇字詰原稿用紙に書いたとすると、一四～一五枚ということになる。百数十日間毎晩――休んだ晩があったとすると一晩の枚数はより多かったことになる――この速度で、しかもあれだけの内容のものを書くことは、驚異的なことといえよう。

そして執筆速度がこうであることは、Grundrisse の原稿がどういう性質のものであったかを考察するに当たって、かなり

考慮されるべき一要因になってくると考えられるのであるが、そのことについてはあとで述べる。

(16) ここでマルクスは「最後の仕上げ」にとりかかっていると書いているが、このあと一八五八年三月一一日付の同じくラサールへの手紙のなかで、第一冊は「五―六ボーゲン以下でまとめるのはむずかしいだろう。だがそうするよう最後の仕上げのさいに(bei der finalen Ausarbeitung)努力してみよう」(既掲)と書いている。後の手紙での「最後の仕上げ」は文字どおりの最後の仕上げであるが、上の手紙で「最後の仕上げ」という言葉を用いているのは、長年にわたって研究してきたことの最後の仕上げにとりかかっているのだ、というほどの意味で言っていたのであろう。

(17) 「事の進みはきわめて遅々たるものだ」という手紙を掲げただけでは、マルクスが仕事の進行具合について述べている手紙の掲げ方としては片手落ちになるので、この一カ月ほど前の一八五八年一月「一六日ごろ」と推定されているエンゲルスへのつぎの手紙を併せ掲げておこう。「……僕のほうは三週間来ふたたび薬の厄介になり、やっと今日またやめたところだ。夜業を……あまりやりすぎたのだ。それはそうと、仕事はかなりはかどっている(Übrigens finde ich hübsche Entwicklungen)。たとえば、これまで行なわれてきたような利潤学説を、すっかりつき崩してやった。問題を論じる方法では(In der Methode des Bearbeitens)、ほんの偶然のことから……ヘーゲルの『論理学』にもう一度ざっと目を通した(wieder durchgeblättert hatte)ことが、大いに役立った」。

四　ノート第七冊六四ページのこと

話をあまり錯綜させないために、これまでノート第七冊の六四ページのことについては触れないできたが、ここでそのことについて記しておくこととしよう。

一八五八年六月はじめにつくられたとみられる「七冊のノートへの索引」は『グルントリッセ』の S. 856〜867 に収録されているが、その S. 865の三二〜三三行のところにこう記してある。Abnutzung der Münze in der Zirkulation (流通における鋳貨の摩滅). VII, 64, VII, 61, [S. 759_{40}—760_{22}]. ここの VII はノート第七冊のことであり、64, 61は

そのノートにマルクスがつけていたページである。また角括弧内は編集者が VII, 61 について『グルントリッセ』の該当ページを記したものである。

ここできわめてふしぎであることは、マルクスがノート第七冊の六四ページを指示していることである。上来『グルントリッセ』での Grundrisse 本文の収録にしたがって、ノート第七冊の最後のページは六三ページだとして見てきた。すくなくともノート第一冊からマルクスが書いてきた一連の原稿である Grundrisse としては、ノート第七冊の六三ページが最後のページだとして見てきた。ところが「七冊のノートへの索引」としてマルクスが記しているもののなかに六四ページがあるとすると、『グルントリッセ』での Grundrisse の収録は、すくなくとも最後の一ページ分を欠いていることになる。

しかもこの六四ページは紛失しているのではない。『グルントリッセ』編集者は「索引」の右の箇所に脚注を付してつぎのように記している、――「VII, 64はノート第七冊の六四ページでの引用文に関連している (bezieht sich auf ein Zitat auf der Seite 64 des Hefts VII)。――注解 (Anmerkungen) を見よ」と (S. 865 下欄)。そして巻末の編集者「注解」のところでは、「„Grundrisse“ のノート第七冊六四ページにつぎの抜き書き (Auszug) がある」として、マルクスが Gold-Weighing-Machines (金秤量機) という小見出しをつけて Dodd 著の *The Curiosities of Industry and the Applied Sciences*, London, 1854 から抜き書きしている文を英語の原文で掲げている(S. 1052～53)。

この抜き書きは、コットン (Cotton) が発案した金秤量機の性能とか、金属以外に牛や貝、等々がかつては貨幣として用いられたこととか、金の自然的属性が貨幣としてこれを使うのに具合がよいこととか、金貨や銀貨が人の手から手に渡るうちにどの程度摩滅するかとか、などについてドッドが述べていることをかなり長文にわたって抜き書き

しているものである。

そして『グルントリッセ』編集者はこの「注解」で、ドッドの書からの右のようなマルクスの抜き書き文を掲げたその終わりに、つぎのように付記している。Siehe zu dem Auszug von p.〔16〕Text und Note „Zur Kritik“ etc. p. 87（〔一六〕ページの抜き書きと『経済学批判』八七ページの本文および注とを対照せよ）．この『経済学批判』の p. 87 は一八五九年版のものであり、*Werke* 版だとBd. 13 の S. 89 である。そこでは本文のなかで、ここでマルクスが抜き書きしているドッドの書一六ページからの引用文が掲げられており、脚注でドッドのこの書名が記されている。なお、『経済学批判』のなかで、このドッドの書からここでマルクスが抜き書きしているものに関係がある箇所は、『グルントリッセ』編集者が挙げている右の箇所だけではないのであって、同じく *Werke* 版だと S. 91 のところでも六行ほどにわたってコットンの金秤量機の性能について記している。そこではドッドの書に拠ったという出典挙示はなされていないが、その記述は明らかに右のノート第七冊六四ページでドッドの書から書き抜いたものに拠っているのである。

つまり、このように六四ページは紛失しているのではないし、またこの箇所は「索引」で指示されているだけでなく、実際に『経済学批判』のなかで二箇所で使われている箇所なのである。

『グルントリッセ』編集者は、「索引」のさきの箇所にたいして、いま一つ「Abnutzung……VII, 61. durchgestrichen（線を引いて消されている）」という脚注をつけている。マルクスは前に書いた原稿をのちの原稿で使ったさいにその箇所に線を引いて消しておく習慣があるのであって、「索引」は原稿ではないが、ここを使用したという印に線を引いたのであろう（この「索引」のなかで durchgestrichen という脚注が付されている箇所はほかにも多い）。そして右に

見たように、実際に『経済学批判』のなかでこの「流通における鋳貨の摩滅」についての六四ページの箇所は使われているのである。(18)

こうしたノート第七冊の六四ページを、『グルントリッセ』編集者はなぜ Grundrisse のなかに取り入れずに、六三ページの「価値」の章の末尾で切ることにしたのだろうか。この編集の仕方はその後の一九六八、六九年のロシア語版 *Werke* の第四六巻でも同じである。また新ＭＥＧＡの第二部第一巻は現在まだこのノート第七冊の部分を収録する第二冊が刊行されていないが、第一冊で Grundrisse の「主要内容」についてつぎのように記している、――「……資本と利潤にかんする篇を完成せずに、マルクスは貨幣の章および資本の章への種々の補遺を書くことに移っており〔資本と利潤の篇は資本の章の「第三篇」であったのであるから、ここで「資本の章」への「補遺」と言っているのはやや言葉足らずであるが、この「第三篇」より前の部分に属する補遺と言うつもりでこう書いているのであろう〕、そして最後に(schließlich)、価値の章の冒頭をスケッチしている」(*a. a. O.* Apparat, Teil 1, S. 30. 傍点および〔　〕内―三宅)。したがって、新ＭＥＧＡでも Grundrisse を「価値」の章までで終わりとする予定であると見られる。

なぜこうした編集の仕方をしているのであろうか。マルクスが自分の書いた一連の原稿にたいして索引をつくり、その索引のなかで指示しているページを、それが紛失しているのでなく現存しているにもかかわらず、またマルクスが実際にその箇所をあとで使っているにもかかわらず、編集者がその一連の原稿のなかからはずしているということは、なんとしても不可解な編集の仕方だと見ざるをえない。

そこで、念のためロシア語版 *Werke* の第四六巻第二冊について見ると、そこでは「索引」のここの箇所につぎのような巻末「注解」を付している。――「ノート第七冊の六三ページで、原稿『経済学批判』(一八五七―一八五八年の

草案）は急に中断されている。このきわめてよく書き込まれたノートのその後の全ページは、さまざまな著書や定期刊行物からの抜き書きで埋められている。このノートの六四ページには、摩擦による鋳貨の摩損についての抜き書きを含むジョージ・ドッドの著書《The Curiosities of Industry and the Applied Sciences》(London, 1854)からの抜き書きがある」云々と（p. 535, ПРИМЕЧАНИЯ 98. 既掲の山本義彦「ふたたびロシア語版『経済学批判要綱』について」(2)、三四ページ参照。傍点—三宅）。これで見ると、ノート第七冊は六三ページでの「価値」の章につづいて六四ページにドッドの書からの抜き書きがあるほか、このあとにも抜き書きのページがつづいていることになる。

ノート第七冊の全体が何ページから成っているのか、六四ページ以下抜き書きがどのくらいつづいているのか、そうしたことは、新ＭＥＧＡではノートのそれぞれの冊について詳細を記しているのでこの当該部分——第二部第一巻第二冊——が出るとあるいは分かるかもしれないが、いまは分からない。しかしおそらく、『グルントリッセ』、ロシア語版、および新ＭＥＧＡの編集者はいずれも、この抜き書きがかなりの量つづいているので、この部分からをExzerptheft（抜き書き帳）の性質のものとみなし、原稿 Grundrisse から切り離すことを考えたのではなかろうかと想像される。またそのさい、「索引」でノート第七冊六四ページと記しているのは「索引」中の「第二案」のところであるが（「索引」は第一案と第二案がしるされている）、「第一案」は一八五八年五月末に Grundrisse の筆を置いて六月はじめにつくったとしても、「第二案」をつくった時期はかならずしもはっきりしない、といった考えも加わったのかもしれない。そういったことからも、この六四ページを、六四ページ以下の分と一括して抜き書き帳として取り扱ってしまおうと考えたのかもしれない。

しかし、かりに右のような考えから切り離したのであったとしても、やはり六四ページのところは Grundrisse の

なかに含めなければまずい。その理由は前述のように、マルクス自身が「七冊のノートへの索引」という表題をつけてつくった「索引」のなかでこのページを指示しているからである。そうであるからには、一連の原稿のなかからこの部分をはずすことは、遺稿編集者としての裁量をなしうる範囲をこえている事柄ではないかと考えられるのである。

なお Grundrisse の前のほうのなかにもこの六四ページのドッドからの抜き書きのような形でいろいろな書について記している文は数多くあるのであって、その点この六四ページが Grundrisse の他の部分にたいして異質であることはないのである。また、ノート第七冊はさきのロシア語版での編集者注によるとこのあとだいぶつづいて書かれているようであるが、「索引」のなかで六四ページよりあとのページを指示している箇所はない。いいかえれば、マルクス自身が「七冊のノート」として考えていたであろう範囲は、目に見える材料で知りうるかぎりでは、六四ページどまりということになる。

ところで最後にいま一つ。これは記しておくまでもない自明なことであるが、「索引」のここをマルクスが書いたときにはノート第七冊のすくなくとも六四ページのこの箇所は――したがって六三ページの「価値」の箇所もということになる――すでに書いてあったことになる。六三ページは「索引」で指示されていないので、索引づくりの前に書いたものかどうかは「推測」ができても「確定」はしえないのであるが、この六四ページが「索引」で――前記のように第二案のなかではあるが――指示されていることによって、ともかくこれが「確定」されることになる。

(18) durchgestrichen という脚注は VII, 64 だけでなく VII, 61 にも及んでいるが、このノート第七冊六一ページの箇所も『経済学批判』で使われている。すなわち、ノート第七冊六一ページは『グルントリッセ』では S. 758 の三二行目から S. 760 の終わりの四二行目までであるが、この S. 760 の三～九行で掲げている匿名者の書 *The Currency Theory reviewed* からの引用文が、『経済学批判』*Werke* 版 S. 89の本文中で使われており、それにたいする脚注のところで、この匿名者著の書名およ

びページを挙げている。そしてこの脚注ではそれとともに、『グルントリッセ』S. 759 の四一〜四四行で記しているガルニエ(Garnier)の書からの引用文が掲げられている。また『グルントリッセ』S. 760一九〜二五行のところでモリソン(Morrison)の一八三七年の書からイギリスでのソヴリン金貨の最軽量目の規定を引いているが、『経済学批判』ではこれを引用の形をとらずに S. 91の本文中で記している。

なお右のソヴリン金貨の最軽量目の規定について、右の Grundrisse での引用文ではソヴリン金貨が「〇・七七四グレーン以上(mehr als 0.774 grains)」重さに不足が生じたさいと記されているが、『経済学批判』のほうではここが、「〇・七四七グレーン以上(mehr als 0.747 Gran)」重さを失ったソヴリン金貨は、となっている。イギリスで金本位制を法制的に確立したのは一八一六年の「ゴールド・スタンダード・アクト」であったが、そのもとでは、ソヴリン金貨の標準重量は一二三・二七四グレーン、法貨としての最軽重量は一二二・五グレーンであった(*Dictionary of Political Economy*, ed. by R. H. Inglis Palgrave, vol. I, 1915 の Abrasion の項による)。したがってここは、「〇・七七四グレーン以上」失ったさいというのが正しい。つまり『批判』の数字のほうが誤りである。マルクスが転記のさいにミスをしたのであろうか。

(このあと「価値」と題する断章の性質について少々記し、また新ＭＥＧＡ第二部第一巻第一冊での編集者「序文」の記述にたいする若干の疑問を記して、Grundrisse についての部分を終わりとし、つぎに移ることとする。一九七七年五月。)

(追記。——本稿**四**で述べたノート第七冊六四ページの件については、本稿を印刷に回したのち、この第七冊は計二七七ページの通しページをもつ膨大な冊であること、等々が分かったが、それらについては次稿で「補記」として記しておくこととする。)